フクロウの伝説と生態をさぐる

六年一組

高木久仁暁

目次

1、はじめに　1

フクロウとはどんな鳥か

2、フクロウの体の特徴

視野について　2

目について　2～3

耳について　3～4

つばさについて　4

ペリットについて　4

日本のフクロウ達の特徴・生活

フクロウ－昼は隠れる鳥－　5～8

アオバズク－初夏にわたってくる－　8～9

シマフクロウ－アイヌの村を守る神－　9～10

フクロウ博物館

豊島区にある、フクロウ博物館　11～12

世界のふくろう　13～14

ススキミミズク　15

3参考文献　16

4まとめ　17

はじめに

ぼくはふくろうが大好きです。とっても愛敬のある顔をしています。ぐるっと顔が回転したり、ずんぐりとした体が面白いです。また、ぼくの住んでいる豊島区は、ふくろうの形をしていると聞きました。池袋にいけば、あちこちの公園にふくろうの形をした像などがあります。駅を出て歩いていても、いたるところでふくろうが出迎えてくれます。カバンや食器、おもちゃにデザインされたり、マスコット・シンボルマークになっていたり、ポスターにのっていたりもします。ふくろうのいる喫茶店もあるそうです。ぼくの家には、二つの「のれん」がありますが、どちらも可愛らしいデザインです。世界のふくろうにまつわる伝説はいろいろです。日本では、漢字で福朗、福来ろう、不苦労などの当て字ができるから、「福を招く鳥」のイメージがあります。最近、幸運を招くとふくろうグッズが大人気です。

ぼくは、ふくろうと深い関わりのある豊島区民として、ふくろうについてもっと深く調べてみようと思いました。

フクロウはどんな鳥か

フクロウ類の特徴は、夜間に活動することです。世界には約9000種の鳥類が記録されています。ほとんどの鳥は、昼間の明るい時間帯に活動します。夜の間動きまわる鳥は、フクロウ類、アブラヨタカ類、キーウィ類、250種あまりしかいません。鳥類のわずか3%にあたります。このうち半分以上がフクロウ類146種を数えます。

フクロウの体の特徴

フクロウは、すぐれた夜の狩人です。暗闇でも獲物を見つけ、しっかり捕らえられるように、体のいろいろな部分が発達しています。

※視野について

まずフクロウの特徴は、正面を向いた顔にある大きな目です。他の鳥は目が顔の両側についていますが、フクロウの目はまん前についています。そのため、両眼で見ることができる視野が広くなります。両眼視できる視野が広いとで、獲物までの距離を正確につかむことができます。

たとえばミミの場合、目が顔の両側についていて、両眼視できる視野はくちばしの先と頭の後ろの狭い範囲です。わずかな視野でしか距離感がつかめないということになります。

しかしフクロウの目は正面向きに固定されているので、左右や後ろを見ようとしても動かすことができません。それを、やわらかな首がおぎないます。胴体はそのままで、真後ろを自由に向いたり、頭を上下逆さまにしたりできるのです。

目について

フクロウの目は、大きな※瞳孔を持っています。そのため目の後ろにある網膜に、より多くの光を送り込むことができます。大きな瞳孔は、他の鳥よりずっと多くの光を集める能力を持っています。暗いところでも、網膜に大きくはっきりとした像をむすぶことができます。

少しの光があれば、フクロウは、暗闇でも自由に飛びまわることができ、えものを見つけることができることができるのです。

・フクロウとシギの視野の比較

視野
両眼視できる視野

目が前向きについていて、両眼で見える視野は広い。

目が顔の両側についていて、両眼で見える視野は狭い。

※視野…眼を動かさずに見ることができる周辺の範囲。

※瞳孔…主にひとみのこと。

フクロウ先生の豆知識

片目をつむって、両手の人差指どうしを離してからくっつけてみてください。できるかな？

耳について

暗闇で獲物をのがさず捕らえられる秘密は、フクロウがすぐれた耳を持っているからです。フクロウは、枯れ葉や枯れ草の上をネズミが歩く「カサカサ」という高周波の音にとても敏感に反応します。たとえば真っ暗闇で何も見えない林でも、地上の枯れ葉の上を歩くネズミの音だけで、その位置を正しくつきとめることができます。それができるのは、フクロウの耳の構造が特別だからです。頭骨を見ると分かるのですが、フクロウの耳の位置は左右で異なっています。上下にややずれており、人間のように対称になっていません。また左右の耳の穴の大きさも違っています。左右の耳に音がとどく時、時間差と強さの差が生まれます。それでフクロウは、音を立体的にとらえ、獲物の位置を正しく知ることができるのです。

フクロウの頭骨

左右の耳の位置がずれていて、大きさも違う

アメリカの研究者が、実験をしました。まったく光のない真っ暗な部屋にフクロウを入れ、ネズミを放ったのです。すると17回のうち、13回、フクロウはネズミを捕らえました。すばらしい耳です。フクロウ類の多くは、大きくて広い顔を持っています。ハート形の顔盤は音を集めるパラボラアンテナの反射板と同じ役目をしているわけです。

つばさについて

フクロウがすぐれた狩りをできる秘密は、音を立てずに飛べるつばさにもありました。フクロウのつばさの羽毛は、一枚一枚の幅が広く、羽の前の方は細かくさけたようになっています。表面はとてもやわらかく、なめらかです。飛んでいる時、つばさに空気があたっても、空気はなめらかに流れて音は出ません。

音を立てずに飛ぶことは、獲物が出す音を聞きやすくします。そして獲物には、飛びかかってくるフクロウの音がほとんど聞こえません。気が付いたときは、フクロウの爪でおさえられています。

ペリットについて

フクロウは、獲物の小動物や小鳥を丸呑みにします。丸呑みにしたあと、骨、歯、嘴、獣の毛、小鳥の羽など消化できないものを、まとめて吐き出します。円筒形のかたまりで、それを「ペリット」といいます。ペリットを集めて細かくほぐし、中のものを調べると、フクロウがなにを食べているか分かります。食べ物が明らかになるだけでなく、季節によって食べ物がどのようにちがうかが分かります。

フクロウ類は小動物や小鳥などを襲って食べる肉食性です。ワシ・タカ類も肉食の鳥で、それらを猛禽類と呼んでいます。先が鋭くて曲がった嘴、尖った鋭い爪、強力なつばさなど、フクロウ類もワシ・タカ類も、よく似た体つきをしています。ワシ・タカ類は昼の猛禽類で、フクロウ類は夜の猛禽類だといえます。

日本で見られるフクロウのなかまは、つぎの10種です。
コノハズク、リュウキュウコノハズク、オオコノハズク、シマフクロウ、シロフクロウ、アオバズク、トラフズク、コミミズク、ワシミミズク。この中で、頭に長い羽が耳や角のように伸びているものがいます。その羽を、「羽角」といいます。羽角があるものをミミズク、ないものはフクロウという言葉で呼んでいます。けれど、アオバズクは羽角がなくても「ズク」と呼んでいますし、羽角があってもシマフクロウと呼ぶ鳥もいます。これは科学的な区別ではありません。日本のフクロウ10種の内、主な3種について、その特徴や生活について、説明していきます。

日本のフクロウ達の特徴・生活

フクロウ－昼は隠れる鳥－

日本のフクロウの中で、一番親しみのあるフクロウ科のフクロウについて説明します。日本にまだ豊かな自然が残っていた60～70年前、フクロウは人間のすぐそばに住んでいました。東京の市街地でも、フクロウの鳴き声を聞くことができたのです。地方の町や村に行けば、神社や寺の森にフクロウはいました。ありふれた鳥として、人々に親しまれていたのです。いまでは、フクロウの鳴き声を聞くことは、地方の町や村でも難しいことになってしまいました。森がなくなり、大木が切られてしまって、樹洞に巣をつくるフクロウは生活できなくなったのです。　フクロウという名前のいわれのそのひとつは、羽毛がふくれた鳥だから「ふくるる」から「ふくろう」になったというものです。うぶは鳴き声です。ふつうは「ホッホーゴロスケホッホー」のように聞こえます。

それを「ホークロホー」、または「フークロフー」と聞いて、そこからフクロウの名になったというのです。また、昼間は、林の中でうつらうつらしています。そのため「昼隠居」といわれていたのが、「昼隠居」になり、それが変化して「ふくろふ」になったという説もあります。

フクロウの全長は四八～五二センチメートル、つばさを広げると、一メートル近くになります。体はずんぐりしていて、頭がとても大きい鳥です。顔は灰色がかった褐色で、丸くて平面的です。背中やつばさは白っぽい灰色で、黒や褐色の斑点がついています。胸から腹は白くて、縦長の斑点があります。フクロウといえば森で暮らしている鳥、というイメージがあります。

※樹洞：木の穴

しかし、フクロウが食べた物を調べると、開けた草地、農耕地、人家のまわり、ゴルフ場などの、森から出たところで食べ物を見つけています。森の中は、昼間、人間や敵から隠れて眠るところであり、また卵を産み、ひなを育てるところなのです。

フクロウが活動をはじめるのは、夕方になってからです。昼間は、日の光があまりとどかないような木のしげみで、瞼を半開きにしながらじっとしています。夕方になると、木のしげみから出てきます。よく見わたせる高い木などにとまり、獲物を探しはじめます。獲物を見つけるまで、じっと待ちます。獲物を見つけると狙いを定め、つばさを細かくはばたかせながら飛びかかっていきます。音を立てずに飛ぶことができるので、獲物には気付かれず襲いかかります。

太くてたくましい足、鋭い爪でしっかりと獲物をおさえます。

フクロウの食べ物は、ノネズミ、モグラ、小鳥などです。

ハタネズミ、カゲネズミ、ヒメネズミ、アカネズミなどのノネズミ類をもっとも多く食べます。研究者の調査では、補らえたものの約70%がノネズミ類でした。ハタネズミは、農耕地や植林が終わったばかりの造林地などにいて、ムギやイモなどの農作物、また、植林したばかりの若い木を食べます。農耕地や若い木を荒らす害獣なのです。そのノネズミをどんどん食べてくれるのですから、フクロウはとてもありがたい野鳥です。

※褐色、黒みをおびた茶色。

フクロウの巣は、古い大木にできた樹洞です。穴の中には自然に小枝が積もっていて、そこにくぼみをつくって巣にします。巣になる木の穴が見つからない時は、タカやカラスの古い巣、別荘の戸袋や床下、木の根本の穴などを利用しています。地面に卵を産むフクロウもいます。北欧では針葉樹が多く樹洞のある木が少ないので、フクロウのための巣箱をさかんにかけ、巣をつくる場所を提供しています。フクロウが巣をつくりはじめるのは、三月上旬ごろです。巣の中に、2～4個の真ん丸の卵を産みます。大きさはニワトリの卵くらいで白い色です。メスはひとつ目の卵を産むと、すぐに温めはじめます。メスはずっと卵を抱いているので、えさをとりに行けません。かわりにオスがえさをとりにいって、メスに運んできます。卵を温めるのは、27～34日間ぐらいです。かえったひなにはやわらかな白い毛が生えていて、目はまだ開いていません。かえって二週間ほどは、まだメスはひなを温めています。ひなは体温調節ができないので、寒い日があると死んでしまうからです。孵化して二週間すると、メスはひなを温めるのをやめ、自分もえさをとりに外へ飛んでいきます。

おなかをすかせているひなに、たくさんのえさが必要になるからです。ひなのために運んでくるえさは、ノネズミやモグラなど、親鳥が食べているのと同じものです。大きな獲物は、親鳥はくちばしで小さく引き裂いてからあたえます。孵化して一ヶ月が経つと、大きくなったひなは穴から出て、近くの枝に飛びうつります。そしてつぎつぎにひなは巣立っていきます。巣立ったあと、ひなは枝で親鳥からえさをもらうようになります。ひなの体はまだ飛べるようにはなっていません。フクロウのひなは、しっかり飛べるようになる前に巣を離れます。木の枝にのぼるのは、強い爪と嘴を使います。下に落ちることもありますが、また爪と嘴を使ってのぼっていきます。この時期、キツネやワシ・タカなどに襲われ、食べられることもあります。ひなが自分で飛んでえさがとれるようになるまで、三ヶ月ほどかかります。秋をむかえるころ、ひなは親鳥から離れて独り立ちをしていくのです。

アオバズク ―初夏にわたってくる―

日本で繁殖(はんしょく)するフクロウの仲間では、アオバズクは一番見かける機会が多い鳥です。アオバズクは、ツバメとは少し遅れて五月ごろ日本にわたってきて、秋に南の地方へ飛んでいく鳥です。夏鳥といいます。初夏の青葉がしげるころにさかんに活動するので、「アオバズク・青葉木菟(あおばずく)」の名前がつけられました。

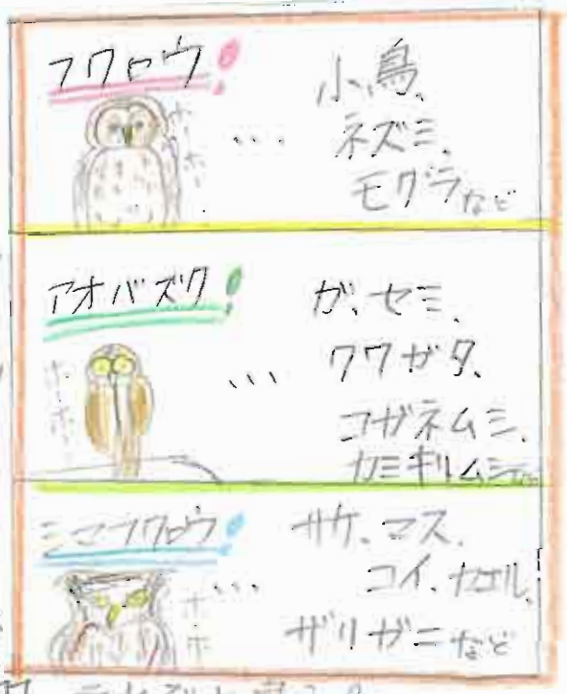
全長は27～30・5センチメートル。ハトより少し小さい鳥です。巣をつくるのは、フクロウと同じように木の穴の中です。巣づくりの時期がフクロウのひなの巣立ちのころにあたるので、フクロウが使った木の穴を、そのまま利用することもあります。

アオバズクは、フクロウと違って昆虫を主食にします。繁殖時期の6月から8月ごろは、ガ、セミ、クワガタ、コガネムシ、カミキリムシなどの昆虫が多い季節です。それらの幼虫をつぎつぎに捕らえて食べます。昆虫は光があるところに集まるので、林を出て、住宅街にやってきて、街灯にくる昆虫をねらうこともあります。街灯に集まる昆虫を補らえにやってきた時、電源からすっと飛び出し、旋回をしたり、直進をしたり、自由に飛び回って昆虫を補らえます。
補らえた昆虫は、上手に料理して食べます。セミは羽をちぎってから、クワガタやコガネムシは羽もとりますが、硬い頭もとってやわらかい胴の部分だけを食べます。秋、アオバズクは、りっぱになった若鳥とともに、越冬地である東南アジアへわたっていきます。

シマフクロウ ― アイヌの村を守る神

シマフクロウは、日本で一番大きなフクロウです。全長71センチメートル、つばさを広げた時の左右の長さは2メートル近くにもなります。体は灰色がかった褐色で、おなかには縦に黒っぽいしまがあります。顔は黒っぽくまゆや目の内側は灰色です。黄色の目をしています。ロシアのウスリー地方、アムール川の流域、サハリン、千島、中国の東北部、北海道東部の森に住んでいます。シマフクロウは主に魚類や両生類を食べる鳥です。サケ、マス、コイなどの魚やカエルの他、ザリガニ、トガリネズミ、などを食べます。小さな魚やカエルなどは丸飲みにしますが、大きな魚をとらえた時は両足でおさえたり、片足でつかんだりして、嘴で引きちぎって食べます。

シマフクロウの「シマ」は、北海道をあらわしています。かつては北海道のサケやマスがのぼる川岸の森にたくさん生息していました。けれどすみかにしていた原生林が無計画に切られていったのと、海から帰ってきたサケが河口で多くつかまえられたり、河川改修で魚がいなくなって数を減らしました。1967年の北海道教育委員会の調査では、北海道全体でたった29羽しか見つかりませんでした。その後、環境庁が保護と増殖の先頭に立って努力をしてきました。シマフクロウの住宅難をなくすために、大きな巣箱をかけたりしています。そのおかげで、数はかなり回復していきました。



昔、北海道に住んでいた、アイヌの人々は、シマフクロウ「コタン・コル・カムイ（村を守る神様）」また地域によっては、「カムイチカプ（神の鳥）」と呼んで敬っていました。アイヌの人にとって、サケやマスなどの大きな川魚はとても貴重な食料でした。シマフクロウは、サケやマスを主食としています。この鳥は人々を川魚が多くいる場所へ導いてくれて、獲物を分け与えてくれるありがたい存在でした。

そして、木の枝にとまった威厳のある姿と夜の闇に響く鳴き声は、人々の心を強くひきつけました。北海道東部の原野で育った更科源蔵は、詩や散文を書きつづけた人です。彼は、またアイヌ文化研究者としてすぐれた仕事をしています。その更科源蔵は、シマフクロウについて次のように書いています。

―シマフクロウが夜に大声で啼くと、「神様が魔神を追っているな」といい、これを飼っていると災害を防いでくれるともいう。この鳥は鮭を捕らえるために集落の近くに集まり、夜中に地響きがするほど大きな声で啼き、捕らえた鮭は咽喉部だけ食べて、あとは人間の食糧にと川原にのこしておくからであろう―

フクロウ博物館に行って来ました

豊島区にある、フクロウ博物館に行って来ました。

色々な国のフクロウの造形物やフクロウの伝説が書かれた紙などが置いてありました。昔からのフクロウとの関係、フクロウはどのような動物と思われていた人などのことが書いてありました。

この造形物は、紀元前6世紀古代ギリシャの香料壜複製です。

南池袋小学校の中にあります。土・日曜日にあいています。

昔や今の各国の造形物が飾られているよ

豊島区はにわかにフクロウの形をしています。
これは、なにかの偶然かもしれませんね。

南池袋の校章には、一羽の鳥がデザインされています。
これは、学校のある雑司が谷地区で江戸時代から作られ、鬼子母神の境内でおみやげとして売られてきた、郷土玩具"すすきみみずく"をかたどったものです。<12>

世界のふくろう

陶製 彩色
家の守り
ふくろう
国:ペルー

陶製
トナラ
みみずく
置物
国:メキシコ

陶製
壁かけ
ふくろう
国:メキシコ

金属 彩色
置物
国:英国バーミンガム

紙製
張り子
国:キューバ

SOAP
STONE
石彫彩色
置物
国:カニア

粘土置物
ふくろう
国：メキシコ

マーブル
置物
国：ベルギー

木製
ブッワフクロウ
国：インドネシア

ポリッシ・インディアン
のトーテム
国：カナダ

白檀透かし
彫りふくろう
国：インド

木製
ふくろう
国：タイ
左側は
オオコノハズクの卵

ハリー・ポッターの
ふくろう

『ススキミミズク』

昔、病気になった母親のために、親孝行の娘が鬼子母神のお告げにより、ススキの穂でみみずくを作って売り、そのお金で薬を買ったという言い伝えが残されています。健康のお守りとして、現在まで続いています。

参考文献

(1) フレーベル館の図鑑 NATURA5 とり
発行者：北林 衛　発行所：株式会社フレーベル館
(2) ニューワイド 学研の図鑑 鳥
発行者：真当 哲博　発行所：株式会社学習教育出版
(3) ジュニア 学研の図鑑 鳥
発行者：岡 俊彦　発行所：株式会社 学習研究社
(4) 世界のふくろう
発行者：安藤 秀幸　発行所：株式会社 里文出版
(5) フクロウの大研究
著者：国松俊英　画家：関口シュン
発行者：江口克彦　発行所：PHP研究所

利用した図書館

巣鴨図書館・中央図書館

利用した施設

・豊島ふくろう・みみずく資料館

まとめ

ふくろうは、昼は隠れて夜活動する鳥だと知りました。ぼくはふくろうの夜に「ホーホー」と鳴く声をきいてみたいと思いました。けれども、自然が失われていく中で、だんだん、それは難しくなっていると知り、さびしくなりました。自然が失われることは、生き物にとって住むところをうばわれることです。又、ふくろうにはいろんな種類があって、すぐれた夜の狩人であることが分かりました。すばしっこい感覚機能をそなえていて、可愛い顔に似合わずすばしっこいし、どうもうです。そんなふくろうですが、古くから人々に親しまれ、敬われてきました。古代ギリシャの時代、日本では「日本書記」の時代から崇められ、愛されつづけてきたふくろうです。ぼくはその歴史や言い伝えを見聞きしながら、さらにふくろうが好きになりました。やはり、ふくろうは"福を招く鳥"のようです。

「コノハ警部」
愛知県警

「ビックル」
1995知的障害者全国スポーツ
大会北海道大会

「めぐりん」
東京都清掃局資源循環
型社会づくり運動

「としちゃん」
東京都豊島区街づくり
公社

「フーちゃん」
袋井市の鳥　フクロウ